

発話のしにくさと性格特性に関する日中比較調査*

◎孫静（神戸大/甲南大），北村達也，△川上翔大（甲南大）

1 はじめに

発話のしにくさは、医学的に健常でも自覚されるコミュニケーションの課題である [1]. 川上・北村 [2]は、日本語母語話者（JNS）を対象に発話のしにくさの自覚が性格因子と関連するという仮説を立て、これを検証するための調査を実施した。しかし、発話のしにくさの自覚と性格因子の関連を示すデータは得られなかった。本研究では、JNS と中国語母語話者（CNS）を対象として、発話のしにくさの自覚と性格特性の関連を調査する。

2 性格因子の調査法

性格特性研究では、5 因子モデル（Big Five）が広く支持されており、開放性、誠実性、外向性、調和性、情緒不安定性の 5 つの高次因子で構成される。本研究では Big Five 尺度短縮版 [3]を用いて性格因子を調査する。この尺度は多項目質問で 5 因子を評価し、特定項目は逆転処理する。

3 調査方法

3.1 調査対象

調査対象は日本在住の JNS 大学生 423 名（男性 233 名，女性 181 名，その他 9 名，平均：20.6 歳，SD：3.84）と中国在住の CNS 大学生 453 名（男性 126 名，女性 320 名，その他 7 名，平均：21.5 歳，SD：1.53）である。

3.2 調査期間

JNS は 2023 年 5 月 23 日から 11 月 24 日まで，CNS は 2024 年 4 月 30 日から 5 月 5 日まで実施された。本調査は「甲南大学におけるヒトを対象とした研究審査」による承認を受けている (No. 23-02)。

3.3 方法

回答の依頼に先立ち，参加者に調査の目的や方法，回答の所要時間，収集されたデータの取り扱い，個人情報取り扱いについて口頭で説明を行った。JNS では，Google Forms を用いて調査を実施した。CNS では質問紙形式で実施した。アンケートフォームは 4 ページに分割され，1 ページ目には同意に関する質問(問 1-1～問 1-5)，2 ページ目には Big Five

尺度短縮版の質問（問 2-1～問 2-29），3 ページ目には発話に関する質問(問 3-1～問 3-4)，4 ページ目には基本属性に関する質問（問 4-1～問 4-3）を含めた。3 ページ目の質問は以下の通りである[1].

3-1. 普段の会話で，自分の発音が悪かったり，声が小さかったりして聞き返されることが多いと感じる。

3-2. 普段の会話で，発音が思うようにできないと感じる。

3-3. 自分の声や話し方が好き。

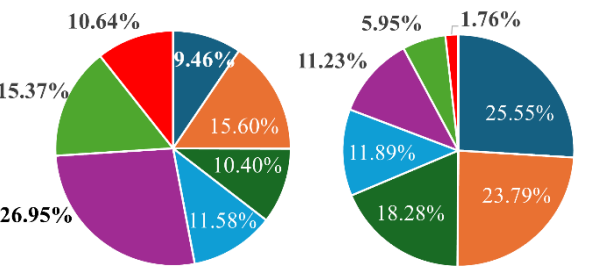
Big Five 尺度短縮版および発話に関する質問は 1(全く違うと思う)～7(強くそう思う)の両側 7 段階評定尺度で回答させた。また，言葉や聞こえの問題を医師から指摘されたある場合は分析対象から除外した。調査対象者がアンケート内容を十分に理解できるよう，JNS では日本語版，CNS では中国語版のアンケートを用いた。

4 結果と考察

4.1 結果

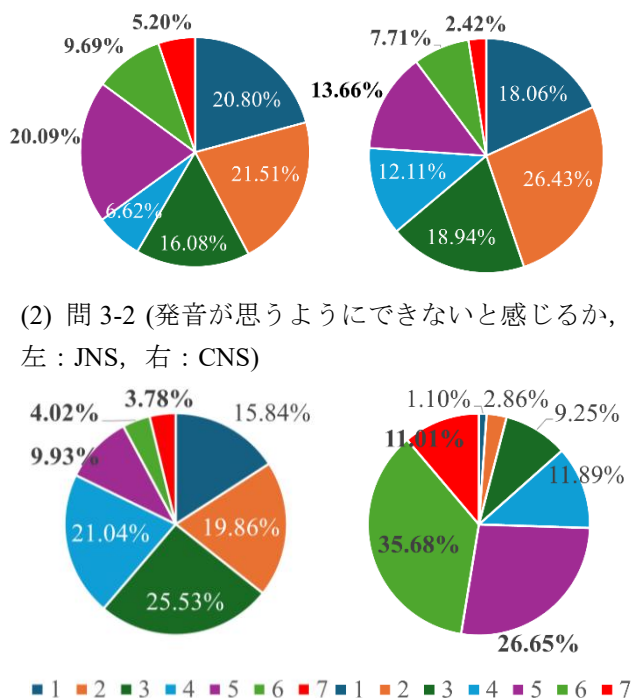
発話のしにくさに関する自覚についての結果は図 1 に示す。

問 3-1 にて 5 から 7 の回答を選択した割合は，JNS が 52.96%，CNS が 18.94%であり，JNS が顕著に高い。同様に，問 3-2 では，JNS が 34.98%，CNS が 23.79%であり，JNS が高い。問 3-3 では，CNS が 73.34%，JNS が 17.73%である。CNS が圧倒的に肯定的である。これらの結果は，JNS と CNS の発話のしにくさの自覚や声の自己評価に明確な差があることを示している。



(1) 問 3-1 (聞き返されることが多いか，左：JNS，右：CNS)

* A Comparative Study of Speech Difficulty and Personality Traits between Japanese and Chinese Speakers, by SUN, Jing (Kobe Univ.), KITAMURA, Tatsuya, KAWAKAMI, Syota (Konan Univ.).



(2) 問 3-2 (発音が思うようにできないと感じるか, 左: JNS, 右: CNS)

(3) 問 3-3 (自分の声や話し方が好きか, 左: JNS, 右: CNS)

図 1: 問 3-1, 問 3-2, 問 3-3 の結果. 1: 全く違うと思う～7: 強くそう思う.

4.2 重回帰分析

問 3-1, 問 3-2 の回答をそれぞれ目的変数 y_1, y_2 とし, 5 つの性格因子を説明変数とした重回帰分析を行ったところ, 以下の回帰式が得られた.

$$y_1 = 25.50 - 0.18x_1 - 0.10x_2 + 0.25x_3 - 0.05x_4 - 0.12x_5 \quad (1)$$

$$y_2 = 15.80 - 0.10x_1 + 0.02x_2 + 0.22x_3 + 0.04x_4 - 0.15x_5 \quad (2)$$

ここで, x_1, x_2, x_3, x_4, x_5 はそれぞれ外向性, 誠実性, 情緒不安定性, 開放性, 調和性の回答を表す. 重回帰分析における有意水準 ($p < 0.05$) を満たしていた説明変数は, 式 (1) では情緒不安定性であり, 式 (2) では情緒不安定性と調和性のみであった. Variance inflation factor (VIF) 統計量を求めたところ, すべての説明変数において 0.5 から 2.0 の範囲に含まれ, 多重共線性はないと考えられる. しかし, 修正済み決定係数は式 (1) にて 0.12, 式 (2) にて 0.10 となり, 回帰式の当てはまりは悪かった.

4.3 考察

本研究の分析結果から, 性格特性と発話の

しにくさ自覚の間に一定の関連性が認められた. 情緒不安定性と発話しにくさの自覚には正の相関 ($r = 0.61, p < 0.01$) が確認され, 情緒不安定性が高い JNS (60.55%) ほど発話のしにくさを自覚する傾向が強い (43.97%) ことが示された. 特に「人前で緊張しやすい」 (78.25%) との関連が顕著であり, 対人不安が発話困難の一因である可能性が示唆される.

一方, 外向性と発話しにくさ自覚の間には負の相関 ($r = 0.58, p < 0.01$) が観察された. CNS は外向性が高い (64.91%) 傾向にあり, 「人と会話することが好き」 (65.64%) という特性が, 発話に対する自信 (自己評価 73.34%) と結びついているようである. 開放性については弱い負の相関 ($r = -0.35, p < 0.01$) が認められ, 特に「好奇心旺盛である」 (79.29%) が発話のしにくさの軽減に関連している可能性がある.

興味深い点として, 誠実性 ($r = 0.05, p = 0.32$) と調和性 ($r = -0.09, p = 0.12$) は発話困難との関連が有意であるという結果が得られなかった. これは, 発話のしにくさが「几帳面さ」や「協調性」といった特性よりも, 感情の安定性 (情緒不安定性) や社会的意欲 (外向性) に影響されやすいことを示している.

5 まとめ

本研究では, 発話のしにくさの自覚と性格特性の関連を日中間で調査し, 次の 3 つの主要な知見が得られた. (1) 発話のしにくさを自覚する程度は, 情緒不安定性の高さや外向性の低さと強く関連した, (2) これらの性格特性は発話場面における心理的プロセスに異なる影響を与えうる, (3) 開放性は中程度の関連を示したが, 誠実性と調和性との関連はほぼ認められなかった.

今後は, 調音器官の形態・動態と発話のしにくさの自覚を中心に研究を進める. そして, 得られた知見を応用した発話支援プログラムの開発を目指す.

謝辞 研究の一部は, JSPS 科研費 (No. 24K00067) の支援を受けた.

参考文献

- [1] 北村ら, 音響誌, 75(3), 118-124, 2019.
- [2] 川上, 北村, 甲南大紀要, 17(1), 35-43, 2024.
- [3] 並川ら, 心理学研究, 83(2), 91-99, 2012.